土木界へ望む 19

〈市民の技術〉からの出発を

田村　明*



私は都市経営や計画の仕事をしている関係から，土木屋さんたちとは毎日おつきあいしているし，いっしょに仕事をする立場にいる．土木とは Civil Engineering の訳だとされているわけだが，これは字のとおり読めば「市民の技術」であり，市民を主体にした都市の技術である．私自身の仕事も，自治体の場で「都市の経営」や「都市の計画」「都市の技術」をどう確立し展開してゆくかということであり，広い意味でいえば Civil Engineer の仕事であるとも言える．最近用いられるようになった「都市工学」という用語も，Urban Engineering などというよりは，Civil Engineering といったほうがピッタリくるように思われる．

もともと土木的な建造技術は，古代以来深く軍事と結びついたものであった．築城術，道路建設，架橋などももっぱら軍事的な目的のものであった．西欧都市のほとんどが城壁で囲まれているのも，もちろん軍事的防御目的である．中世までの土木屋は軍事技術者だったのである．ところが火薬の発明により，軍事技術と市民技術とが分離し，また，市民社会の確立を背景に Military Engineering から分れて Civil Engineering という用語が 18 世紀の半ばごろから市民権を確立してきたのである．同時に，産業革命以来，産業資本に直接奉仕する Mechanical Engineering に対しても，市民全体に奉仕する技術としての Civil Engineering が特に意味を持ってくる．それらは戦争や産業に直接奉仕するものではなく，むしろそれらのアンチテーゼの技術として市民生活の維持と向上を目的として生まれたものである．一部特定の市民や権力者のものではなく，すべての市民に身近に奉仕する平和な技術なのである．かつて都市づくりの基本であった軍事的な城壁は取りこわされ，そこに市民のために緑地や道路を建設する市民技術が必要になってきた．

このように，土木とはその文字にある単なる土や木の処理，鉄やコンクリートの構築という建設技術というだけではなく，この技術の実体であり目的である市民や市民生活がその中心にはっきり意識されなければならないはずである．ところが土木という用語はいつのまにか構築技術の面だけが強調され，せっかく軍事的な建設技術から市民的建設技術を分離確立していった意味をもつ「市民」の面が忘れられかけ，大規模建設技術だけが正面に立ち，都市や市民に身近な技術はやや軽視されがちである．そこでもういっぺん市民の技術として土木技術を見なおすことが必要であろう．そのような目で見るとき，市民社会全体の要求にじっと耳をかたむけ，目をすまし，よい意味の市民性，社会性をより深くし，また身近な技術として人間くさい，暖みのある技術となってもらいたいものである．土木屋さんは一般に極めて仕事熱心で，何がなんでもやりとげようという情熱と馬力を持ち，また組織的な結束力を持っている．それは土木屋さんたちの優れた資質の一面であろう．しかし，その反面，自分たちの仕事と組織の中に陶酔して，土木以外の社会のさまざまの要求に冷淡だったり，タテ割専門的で全体的，総合的な考えいささか欠けていたように思われる．自分たち専門家だけが集まって他は素人として排除するのではなく，技術以前の市民の問題に始まり幅広い社会的要請の中で土木技術が駆使されなければならない．

しかし，そうはいっても土木の分野は，机上の空論ではすまず，現場でやってみなければならないものだし，また相当広い地域にわたって社会に影響する仕事をするのだから，比較的狭い地区で自己完結的な仕事をする建築技術者や造園技術者よりも幅の広い社会性を自然に身につけている．また昨今のように反対運動の抵抗などの中で，いやでも社会性を身につけざるを得ない．そして技術だけで理解できない市民や社会の問題にいささか戸惑いを感じているようである．

そうした中で，今こそ原点である市民の技術に立ち返り，市民社会の中の開いた技術になる必要がある．大構築技術はもちろん必要であろう．しかし常に大きなものがよいわけではない．仕事をやりぬくことは必要であるが，周囲を無視してよいわけではない．専門性は必要だが，全体的把握や，時によると素人性さえ必要である．安くて丈夫なだけでなく，美しく市民に親しまれるものでなければならない．多くの困難に直面している土木事業にとって，市民の技術からの出発をすることによって明日の土木の意味を再発見し，新しい自信につなげてほしい．

(1976.10.25・受付)

* 横浜市技監 企画調整局長